

# ビデオをめぐるメディア経験の多層性

——「コレクション」とオタクの 카테고리運用をめぐる——

永田 大輔

1989年のある事件をきっかけとしてオタクは社会問題化する。事件報道で被害者の自室が取り上げられ、部屋のビデオコレクションがオタクと結び付けられた。その結び付けをめぐる二つの語られ方が存在した。マスメディアが事件の加害者を「オタクの代表」とする一方で、批評家が加害者を「真のオタク」でないと語ったのだ。それらの語られ方が可能になった文脈を当時のビデオの普及状況との関連で検討する。

加害者がオタクの代表とされる際に、加害者を「通して」オタクと一般層を切り離した。対して加害者が真のオタクでないという根拠に持ち出されたのは、「コレクションの未整理」である。ビデオテープが高価だった時期は整理が節約の便宜に基づくものだったが、次第に意味を失い、批評的言論の中で「長くオタクを続けてきて」きたことと読み替えられ、加害者がオタクでない根拠とされたのだ。こうした操作はオタク「から」加害者を切断操作するものだった。

## 1 はじめに

現在では、オタク<sup>1</sup>という言葉は、一般的な用語として定着した。ある文化集団を指す流行語として30年以上に渡って延命し続けている言葉はそれほど存在しない。それだけでなく、オタクという趣味集団を論じることが現代社会の重要な課題であるという評論も数多い<sup>2</sup>。それでは、オタクという言葉は元来どのように語られてきたのだろうか。

オタクという言葉は1983年に中森明夫が、『『おたくらさあ』なんて呼びかける』（『漫画ブリッコ』1983年7月1日:172）人々の「発見」を起源とする。これは互いのことを奇妙な呼称によって区分する行為を観察し、それを「おたくと呼ぶことに」したことをその起源とする言説である。元来オタクはその特異な行為への観察を意味する言葉であった。しかしオタクという言葉が一般社会に浸透するまでには、1989年の連続少女殺害事件<sup>3</sup>において加害者である宮崎勤のビデオテープをコレクションした部屋とオタクというカテゴリーが関連付けられ社会問題化されることを待たねばならない。1989年に中森自身がそのことを振り返っている。

「ポンピュー族」「金ゴロー族」「こたつむり族」「出産ギリギリ族」「アンマリッチ族」「仮面少女」「フライヤーズ」「新男類」……いちども耳にしたことのないこれらの「流行語」の数々を掲載している89年度版の『現代用語の基礎知識』『イミダス』には、「おたく」はもちろん、「おたく族」「オタッキー」の姿もない。（中森1989:89）

一連の「いちども耳にしたことのない」「流行語」を並べ、それらが記載された『現代用語の基礎知識』と『イミダス』に「おたく」という言葉が載ることがなかったとしている。中森は、オタクという言葉が事件をきっかけに社会問題化し、次巻以降はこの言葉が掲載されると予測している（中森1989:89）。このように連続少女殺害事件で、オタクというカテゴ

リーは一般に認知され、オタクというカテゴリーを考える上で一般層との関係を問題にする必要が生じるようになる<sup>4</sup>。その事件に関して加害者である宮崎が「オタクの代表」とされた一方で、「真のオタク」ではないという議論もなされた。本稿ではそれぞれの言論が語られる条件に着目する。

その契機となる事件に関する検討はこれまでどのようになされてきたのだろうか。ある事件を社会学的に考えるうえで重要な議論として、連続少女殺害事件等の社会的に耳目を集める事件があった際に、それを自分たちとは異なるという形で「異形」に押し込め、自分たちの共同体の「外側」にあるものだと位置づける「切断操作」というものがある（宮台 2002: 92）。こうしたマスメディア、そしてその向こうにいる大衆の切断操作として事件を片付ける方法もあるが、特定の集団に関する事件の結びつけ全般に当てはまるのが切断操作であり、当該事件の文脈性を無視したものとなる。これにより、個別の行為や語りに定位する必要がほぼなくなる。重要なのはどのような意味で切断操作といえるのかという個別的な文脈のほうにある。

連続少女殺害事件を契機として社会全体にオタクという言葉が浸透し、数々のオタク論が論じられるようになったことに着目した議論は多い。その中でも浅野（2013）は、若者語りとの関連からオタク論を見ている。浅野は、オタクが若者語りの前線を形成してきたとし、「若者に見られる全般的な傾向を語る際に欠かせない象徴的なキーワードになっていく」（浅野 2013: 104-105）とする。そして、オタクの姿が、批評的言論において「コミュニケーション不全な存在として流通したと論じる。そのきっかけとなるのが宮崎事件であるという。

宮崎勤に関して、「大塚英志がはっきり指摘したように、この青年はオタクであることにむしろ失敗していた」（浅野 2013: 103）と本論と類似した点に着目している。しかし、「マスメディアによってある種の誇張を受けながら増殖する彼のイメージは、オタクの典型像として社会に流布していった」（浅野 2013: 104）とし、宮崎がオタクの代表としてネガティブに語られるのはマスメディアの報道の問題としている。そのうえで「オタクという語が帯びたこの強烈な否定性は、（中略）大人たちが抱くある種の不安を反映」（浅野 2013: 104）したものとしており、この言論が発せられた文脈を脱文脈化している。それに対して本稿では、80年代のビデオ史<sup>5</sup>の文脈から宮崎をオタクの代表としてみなす言説と宮崎はオタクではなかったという言説の双方を検討する。ビデオというメディアがオタクというカテゴリーとどのように結びつき、その際にそれぞれどのようなビデオの使用実践が根拠とされたかを本稿ではみる。

オタクの言説が問題化する文脈を考える際に、ビデオの使用実践以外にも参照の可能性は存在する。オタク研究の主要なフィールドとしてはコミックマーケット等に注目が集まってきた。しかし、年に二回のコミックマーケットはオタク的な振る舞いの代表的なものというより、そうした振る舞いや活動の帰結として記述する方が適切であるといえる。様々な諸活動があって結果として半年に一度のコミックマーケットに集まる（ものもいる）のである。そうした対象設定は外部からの観察には適しているが、その前提となるコミュニティ内の日

常性については明らかにできない。日常の振る舞いがどのようにさまざまなアクターによって意味づけられていくのかをより詳細に記述することが重要である。そこで本稿ではオタクが社会問題化するきっかけとなったビデオテープを「コレクション」する行為に着目する。

ビデオテープをコレクションする営みは、80年代にオタクと呼ばれることになる人々の中で最も日常的な行為である。それと同時にビデオデッキの普及率は爆発的に増加しており、ビデオはその他の多くの人々にとっても、日常的に使用するメディアとなっていた。そして、オタクが社会問題化するきっかけとされる連続少女殺害事件はまさに、この複数の水準での行為の意味づけが交錯する場面であったといえる。

宮崎勤の自室の約6,000本のビデオテープが、オタクというカテゴリーに関係づけられる際に、宮崎勤がマスメディア等で「オタクの代表」として語られた一方で、宮崎勤は「真のオタク」ではないという語りも批評家等の間で見られた。ビデオテープをコレクションするという一つの行為の評価として事件の加害者がオタクであるかどうかに関する二つの評価が存在したことはオタクというカテゴリーを考察するうえで重要である。本稿ではこの二つの文脈性を、1989年のビデオというメディアが持つメディア史的条件におけるビデオテープのコレクションに関するそれぞれのアクターの意味づけという観点から考える。(1) マスメディアの語りがなされる前提として、一般層にとってビデオがどのようなものとされていたのかと、(2) 批評的言論が宮崎勤を「真のオタク」ではないとする言論の根拠として持ち出したことがファン集団内でどのような文脈を持っていたのかを事件をめぐる言説が成立する文脈として本稿では検討していく。

本稿の構成は以下である。2章では、新聞を中心として宮崎勤が「オタクの代表」としてビデオとどのように結びつけて語られたかを見る。3章では、その当時のビデオが持っていた社会的配置をもとにビデオテープをコレクションすることの持つ一般層にとっての意味を考察する。4章では「宮崎勤が真のオタクではない」という議論がどのようになされてきたかに関して批評的言論を中心として検討する。5章ではそのオタクではないとする根拠として持ち出されたことがファン集団の中ではどのようなものとして存在したのかを明らかにする。6章では、本論の議論をまとめ、それがオタクをめぐる言論とどのような関連にあるかを考察する。

## 2 「オタクの代表」の宮崎勤

本章では、連続少女殺害事件とビデオの結びつけがなされる報道を取り上げる<sup>6</sup>。その際に1節では、どのようにビデオが宮崎勤と結びつけられたのかを見る。2節では、事件とビデオテープのコレクションが宮崎勤1人の問題を超越して問題化されていく様子を見る。

### 2-1 「証拠」としてのビデオ報道

証拠としてのビデオ報道のされ方は、2通り存在する。それはビデオを事件の客観的な証拠と事件の動機としてとりあげる報道である。

警察側がビデオに着目したのは、実際的な証拠としてであった。「宮崎は、一連の事件の現

場である埼玉県西部にしばしば車でドライブに出かけ、ビデオショップでビデオを買うなど、土地カンを持っていた」（『朝日新聞』1989年8月15日朝刊）というように事件当日の足どりの資料として、彼が訪れるビデオ店が周辺にあったかどうかや、事件の当日にビデオカメラを借りていないかが焦点となった。証言が先行して物証が出ず、宮崎が、少女をビデオに撮ろうとして逮捕されたことから、「合同捜査本部は、宮崎の自宅から押収した約6,000本のビデオテープを分析して、宮崎が犯行の過程でビデオを使っていなかったかどうか」（『朝日新聞』1989年8月16日夕刊）が問題となる。大規模な検討作業が行われ、それ自体が一つのメディアイベントとなった。そして、捜査の結果次々と殺害した少女を撮影したビデオテープが発見された。ただ、大規模に人員を割かなければならなかった理由も存在する。

ビデオは大半がテレビのアニメ番組などをダビングしたものだが、カセットの表題と中身が違っていることも多いため、21日からはビデオデッキを55台に増やし、分析作業を急いでいる。（『朝日新聞』1989年8月21日夕刊）

ここでは宮崎のビデオテープが未整理であったために、目星をつけた捜索ができなかったことが指摘されている。このことは一見些細なことに見えるかもしれないが重要な意味を持つ。詳しくは後に検討するが、宮崎がオタクであるのか否かという論点が浮上した際に、ビデオテープが未整理であることが問題として取り上げられたからである。

だが、連続少女殺害事件の報道でもう一つ見られたのが、彼の6,000本に及ぶビデオテープが事件に直接の影響を与えたのではないかというものである。犯行に似た手口を用いている「ホラービデオ」が発掘されたことがしばしば重要な資料として報道され「こうした作品が何らかのヒントになって、宮崎が残忍な犯行に走った可能性があるとして追及している」（『朝日新聞』1989年8月12日朝刊）等の報道がされた。

## 2-2 宮崎勤との切断操作とその範囲

事件の報道において、事件の証拠はもちろん、宮崎一人の動機からも離れ、虚構に没入する若者たちといった事件を拡張する語りが見られるようになる。これは一種の「切断操作」だともいえるが、どのような意味で切断操作だったかが重要である。

▼なま身の人間のつき合いでは、まず相手の立場を考える。時にはかけひきや妥協も必要だ。やりとりの間におたがい自尊心が傷つくこともある。（中略）そうしたことは面倒だ、避けたい、と考える人が若い世代に増えている▼そこへゆくと映像、虚構、機械の領域では自分が想像の中で好きなようにふるまえる。近頃若い男性の中に、しっかりした独自の考えを持つ女性とのつき合いは苦手、というものが多いともいう。濃密な人間関係を避け、想像の中で欲望が大きくなると、はげ口は無抵抗な少女に向かう。（中略）だが、この青年も何かの被害者ではないのだろうか。それが何なのかわからないと、社会は落ち着けない、という事件だ。（『朝日新聞』1989年8月16日朝刊）

「なま身の人間」との付き合いと、「想像のなか」で自由に振る舞うことが対置され、そこで大人の女性と無抵抗な少女がそれぞれ結びつけられる<sup>7</sup>。そして、そうした問題と宮崎が

結び付けられ、「何かの被害者」として語られ、社会全体で考えねばならない問題とされる。また、「現実のわずらわしさを嫌う団塊世代の子供たち」（『朝日新聞』1990年3月30日夕刊）という語りもある。「現実のわずらわしさを嫌う」という特殊性が強調されつつ、「団塊世代の子供」といったように、世代全体と結びつける話法が展開されている。ただ、その一方でオタクという特殊な集団に結びつけられたことでもこの事件は知られる。

この事件で、一躍、マスコミの表面に浮かび上がった言葉がある。「おたく」だ。アニメ、コミック、ゲームなどの熱狂的なファンで、その世界を共有しない他者とは、コミュニケーションを持ちたがらない、若者群を指す。かつて、彼らの間では相手を「おたく」と呼びあったのが、語源という。（中略）宮崎被告の部屋の写真が与えたインパクトが、「おたく」という言葉と結びつき、多くの解釈や批判が、彼らの独特の行動パターンのあり方に集中した。「ビデオや他の映像メディアにのめり込みすぎ、虚実の境目がわからなくなった」と。（『朝日新聞』1990年1月6日夕刊）

前述のように世代への結びつけがなされる一方で、6,000本というビデオテープとオタクという言葉が結びついていたことがわかる。さらに、「他の映像メディアにのめり込み」、「虚実の境目がわからなくなった」と、ほぼ上記の世代全体の拡張と同様のレトリックで語られつつも、「彼ら」という形で特定の集団を想定した議論が展開されている。この曖昧なオタクの使われ方を検討するには、従来問われてきたオタクというカテゴリーになぜ負のまなざしが注がれたかではなく、そもそもビデオというメディアになぜ負のまなざしが注がれたのかというビデオの社会的配置をめぐる問いをひとまず検討すべきである。

### 3 ビデオの1989年における社会的配置と有徴性

それでは、1989年においてビデオの社会的配置はどのようなものであったか。第一に挙げられるのは、急速な普及である。1980年には2%程度だったビデオデッキの普及率は、問題となった1989年には7割に迫っている。つまり、ビデオを所有すること自体はこの時点では珍しいことではなくなっていた。では、なぜ前述した有徴なまなざしが生じたのか。それだけ普及率の高いメディアを事件の「原因」として想定して「切断操作」を行われたことの意味を考える必要がある。7割近い普及率を誇るメディアが、有徴なものとしたのはいかにしてなのか。

ビデオの特性は70年代に急速に普及したカラーテレビと比較するとこの有徴性が明らかになる。カラーテレビが3Cとして、完全に家庭のイメージと結びついたのでに対して、ビデオは個人での消費というイメージと結びついていた<sup>8</sup>。ここではそうした理由として、ビデオというメディアがアンダーグラウンドな環境で流通していたことと、家庭で十全に受容できなかったことがあげられる。

アンダーグラウンドな市場というイメージの根拠として、ビデオ店がこの時点では未だ有徴なものとして存在していたことがある。新聞上でもしばしばビデオ店が問題ある場所として報道された。1980年代中盤にレンタルビデオシステムを日本ビデオ協会が確立し、これま

で法律的にグレーな非加盟店に対して加盟店が増えて行くが<sup>9</sup>、それでも未だに非加盟店が多い頃のイメージが残存した。そのためにビデオデッキ自体は普及しているが、ビデオというメディアはその普及率に比して依然として負のイメージが存在していた。

家庭普及の初期にビデオに性的なイメージがつきまわっていたという指摘は、ビデオを研究する数少ない研究において、共通してなされてきた（溝尻 2012 等）<sup>10</sup>。また、ビデオは教育現場に先行して導入されたこともあり<sup>11</sup>、複雑な機能が付随したメディアであった。ゆえに、家庭に導入されても、多くの家庭ではそのメディアをうまく使いこなせず、テレビを視聴できないときに録画をする等単純な操作のみが行われた可能性がある<sup>12</sup>。こうしたただ録画だけをする層から見たときに、ビデオをコマ送り・編集したり（永田 2015a）、「コレクション」したりするような消費は、珍しいことに映った<sup>13</sup>。それが特定の集団を奇異なものとして結びつけるまなざしへと接続する（永田 2016）。

ただ、10年で70%に近づく急速な普及は前述の構造が緩やかに解体されていくことでもあった。ビデオテープの値段が下落するとともに、一定数ビデオテープが自宅に貯まり始めることは自然なことになった。だからこそ、程度の問題はあるが大量にビデオテープがたまっていくというイメージは多くのものにとって想像可能な事態であった。そこで一部においては「若者」という大まかな把握を可能にし、それが一部の集団へと閉じるだけの語りではない「社会問題」としての語りを生み出したといえる。

この時点でのビデオはカラーテレビに比して圧倒的に有徴なメディアだったのである。長谷（2014）によると、世界を自分のお気に入りの世界にカスタマイズするのが、パーソナルな文化の条件である。これは同時に大衆向けを一律に消費するような世界とは異なるものである。ビデオはテレビをパーソナル化するメディアであったが、まさに89年のビデオをめぐる言説空間はそうした「一部のものだけがパーソナルな消費を行うこと」と「社会全体がパーソナルな消費を行うこと」の問題が混在するような場であった。宮崎勤を「オタクの代表」として語り、ビデオとオタクを結びつける文脈はパーソナル化の一般化への過渡期として存在したのだ。このように特定の集団に結びつけられる一方で若者全般にも結びつくような言論としてビデオに関する言論は存在した。ただ、オタクというカテゴリーに事件が結びつけられることへの危惧が語られるようになる。

ロリコン誌の編集者をしてきた経験を持ち、アニメや若者文化に関する著書もあるフリー編集者の大塚英志さんも、「宮崎に対する社会の反応は、まるで魔女狩り」と指摘する。「本当は社会そのものに、『宮崎的なもの』があるのに、それを認めたくないから、必死になって彼を異端者にしようとしているんじゃないかな。」（『朝日新聞』1989年8月24日朝刊）

識者へのインタビュー等を中心として、オタクを事件に結びつけることを問題視する言論が載せられる。そして、識者たちの一部がオタクを自分たちが語るべき問題として引き受けられるようになる。

#### 4 「真のオタク」ではない宮崎勤

マスメディアが宮崎勤を「オタクの代表」とした一方で、前述したように宮崎勤が実は「真のオタク」ではないという語りも一部では存在した。その語りがマスメディアに対抗しつつ、どのような文脈で語られたのかを見る。

マスメディアが語る言論との差異化を意識しつつ、それを具体的実現するための戦略の一つとして、『Mの世代』における大塚の語りがある。『Mの世代』は、大塚の「二六歳のおたく青年の主張を代弁したところで何の意味もないかもしれないが、彼の生きてきた不毛とぼくが生きてきた不毛がつながっているとわかった以上、そうする他にないではないか」(『新文化』1989年8月17日: 8) という発言をもとに作られた書籍である。

この対談集は「M君のどこに、ぼくはこんなシンクロしちゃったのかなってというのが、ちょっとまだわかんないんですよ」(中森・大塚 1989: 21) のように終始宮崎勤のことを愛着をもってM君と呼び自己同一化しつつ、マスコミも含めて「同世代と言われたときにね、妙に納得しちゃうような」(中森・大塚 1989) という形で世代全体への共感を自分たちの世代の側から実存的に語る。このように世代全体に宮崎勤の問題を拡張する一方で、大塚は宮崎勤がオタクであるかどうかを留保している。

きつと捨てられた子供であるM君っていうのは、マニアとか、おたくみたいなね、疑似共同体が目に見える形で存在しているからそこに行き着く術として、一生懸命、ビデオを集めてマニアのふりをしてみたんだけど、でも、あんまり入れてもらえなかったみたいだね。その意味じゃ彼は、「真のおたく」でも「真のロリコン」でもなかったんだと思う。彼のおたく文化への愛は、何かマニアックっていうよりもまさに「すがっている」という感じに近い。(中森・大塚 1989: 96)

「真のおたく」なるものを想定して、その「真のおたく」のふりをしている、すがっているという表現によって、M君との距離感を確認している<sup>14</sup>。「おたくみたいな」疑似共同体に入れないものをどうするかという論点で対談は進んでいくことになるが<sup>15</sup>、重要なのはここで一度オタクという集団と宮崎勤との関連を切断しようとしていることである。M君が「真のオタク」ではないことの根拠として、「彼、あれを三倍速で撮ってるんだよね。(中略) あと、一本のテープの中に複数の作品を取めている。これもマニアのやり方ではない」(中森・大塚 1989: 96) ことなどが語られ、「強迫的に集め」(中森・大塚 1989: 96) ていると評価し、その「整理」を問題化している<sup>16</sup>。このようにただビデオテープを部屋に「貯めている」だけでは「真のオタク」ではないという議論が展開されているのである。それでは、これらのビデオ使用が「真のオタク」から宮崎を切断することを可能にしている文脈性はどこにあるのだろうか。

その文脈性を検討するために、コレクションをめぐるどのような議論がファン集団内で存在したのかを見る。そこでビデオテープをコレクションすることをめぐる言及がとりわけ多く蓄積されているアニメ雑誌を資料として用いる。

## 5 変容するコレクションの意味論

### 5-1 コレクションにおける数という意味

連続少女殺害事件において、オタクコミュニティ内でのコレクションの作法と宮崎勤の振る舞いのズレの言及が存在していた。だが、そのズレの意味を考察するためには、その準拠先であるファン集団の中のビデオテープをコレクションすることをめぐる振る舞いがどのような意味を持っていたかを確認する必要がある。本章では、そうした当時のビデオ使用の様子を多く観察できるアニメ雑誌上で80年代を通じ、ビデオテープをコレクションすることの意味がどのように形成・変容していったかを見る<sup>17</sup>。

ビデオテープをコレクションすることの意味が初期はどのようなものであったのか。問題となった宮崎勤の家庭では、1974年にビデオデッキを入手している（吉岡2000）。ビデオデッキの家庭普及の本格化が1980年であることを考えるとかなり早い受容である。これと同時期の1973年の時点で日本最大のビデオテープの「所有数」は、372本である（『ビデオジャーナル』1973年6月）。しかし、この数は個人ではなく公民館の所有数であった。事件の15年程前、数百本規模でビデオテープを所有するのは、公的機関や企業だった。この公的機関が所有する数に迫る数をコレクションしているアニメファンがいることが80年代の初めにはアニメ雑誌上で注目される。

この前提として押さえておかねばならないのが、80年代前半は、ビデオデッキはもちろん高価であったが、ビデオテープ自体の価格もかなり高価だったことである。この価格が80年代末に向かって次第に低減していく。このことを背景としてこの時期の言論は検討する必要がある。

ビデオテープがアニメ雑誌上で、コレクションの対象として注目されるのは1980年代の前半である。1983年の6月に『アニメージュ』の「わぁーマニア」という特集企画コーナーの一つとして、「ビデオマニア」が紹介される。

現在ビデオはVHS2台とβ1台を持っていますが2台目を買った理由はテレビの『ヤマト2』を保存のためにとっておきたいと思ったからです。それ以降ずっとアニメ録画し続け、（現在は週に23本を録画）たまったビデオが580本というわけです。現在録っているビデオは、徳間でのバイトが終わり夜の12時ごろ帰宅してから見始めます。だから寝るのは朝5時くらいですね。大学へは、いまほとんどいっていない状態なんです。でも、いまアニメを見ることとそのアニメに関連したバイトを徹底的にやってみたいと思いますから軌道修正をするつもりはありません。（『アニメージュ』1983年6月:90）

ここで言及されたのは580本という数と、その数をもたらす生活のリアリティである。機種の問題も言及されるが、現在どの程度の速度でコレクションを集めているのかに焦点があつまる。また、コレクションを本人が見る限界（＝身体性）の問題が浮上する。ビデオテープ自体の価格が高価であるときにはビデオテープを無駄にすることが許されないからである。それに追いつくために身体を酷使しそのことを中心に生活を考えている様子がうかがえ、ア

ニメにリソースを割いていることが「マニア」を代表する指標として語られている。

## 5-2 コレクションをめぐる二つの争点

前節では数に焦点が当たっていたことを確認したが、コレクションにおいて数だけが重要ではなくなる。ビデオテープの価格自体が低下してきたため、数以外のコレクションに関する言及が増えてくる。例えば以下のようなアニメーターへのインタビュー記事がある。

土器手さんがビデオを買ったのはほんの三年ほど前。しかしテープの数は恐るべき勢いで増え、いまは $\beta$ ・VHSを合わせて600本に到達するのだ。当初はVHS三倍速モードを多用していたが、いまはすべてVHS標準と $\beta$ で録画している。三倍で録画していたう星やつらも再放送で標準でとりなおしている。(『アニメージュ』1985年12月:173)

このように、ただ本数を持っている以上の、質をめぐる論争が起こる。「三倍で録画していた」作品を、標準で取り直すような拘りが現われる。そして、このコレクションの質の問題が前面に出る際には常に二つのことが大きな論点とされていた。「 $\beta$ かVHSか」という機種をめぐる軸と、「VHS標準かVHS三倍速か」という録画方法をめぐる軸の二軸である。

機種に関しては、 $\beta$ が機能面では評価が高かったが、普及はVHSの方が先んじていた。 $\beta$ とVHSは、規格の互換性がなく、80年代の中盤にはVHSの勝利が実質的に決定した<sup>18</sup>。だから、当初は意味を持っていたこの区分も、そのうち、OVA等のコンテンツの入手のしやすさから、VHSを使っていかに得ないという認識に移っていった。

もう一つの対立軸がVHS標準か、三倍速かという点である。これは、2時間のビデオテープに三倍速で録画するべきかどうかという対立軸である。2時間のビデオテープを三倍で録画したときには単純計算で2時間のビデオテープ1本あたり、6時間の映像を録画することができる。しかし、その反面として映像や音声は2時間の標準録画に比べて劣ると言われていた。その中で費用との兼ね合いからビデオテープをどう録るべきかに関して、議論が展開されていた。連続幼女殺害事件の際に宮崎勤を真のオタクではないとする語りに関して問題になったのも同様の点であった。次節ではそうしたこだわりと節約の内的な論理を明らかにする。

## 5-3 節約と質の拮抗

標準か三倍かということをめぐる論理をより詳細に見て行く。そこで問題化していたのは、「よりよい映像を見る」か「よりコストを節約するのか」という2つの論理の対立であった。それを詳細に見ていく。

SONYの $\beta$ 機は最新型であっても $\beta$ Iの再生が可能なので、古いコレクションを保存している人間には重宝がられているのですが、VHS派から見るとマニアの道楽にしか見えないようです。マニアといえば、VHS派の人は何故かエンディングをカットする人が多いようです。オープニングは同じものがひとつ入っていれば良いのですが、エンディングは貴重な資料だと思います。(『Animec』1984年3月:134-135)

ここでは最新のβ機がVHSを使う側から見ると「マニアの道楽」と語られている。また、オープニング(OP)を一回とればいいが、エンディング(ED)は貴重な資料なので飛ばさないというのは、エンディングの方のスタッフや声優のクレジットが毎回異なるためであるが、こうした選択は、ある程度、個々人の判断で行われていたこともここからわかる。

そうした節約の技法が、様々な消費に現われ、自分なりの整理が行われる。そうした技法が発達したのは、何よりもビデオテープ自体が高価であったからである。例えばその節約の技法を考える上で重要なのが、T120<sup>19</sup>のビデオテープにいかにアニメを詰め込むかという実践である。以下の一連の投稿とそれへの編集のコメントを見る<sup>20</sup>。

標準モードでは、T120の場合毎回本編のみ(OP、ED、予告をcut)すると5話まで詰ります。3倍モードではOP、ED、予告を毎回録り、CMのみcutすると、一本に14話まで入ります。(愛知県名古屋市A)

VHSテープの有効(?)な活用法T-120を使用した場合 ※標準モード…OPを頭に、CMをカットして5話入る。そして5話収録後にEDを入れる。するとテープが約8分余る。これは3倍モードにすると24分、1話分の時間になるのです。※3倍モード…OPを最初だけ、EDをラストだけに入れると約16話、ギリギリまで詰めると17話入る。しかしこーゆーテープは後で見る気がしない。(埼玉県草加市B)

(中略) いつもCMカットができるわけではなく、留守録ということもあるので、4話分プラス半分(OP+本編Aパート)を1本のテープに入れてあります。これだと2話分が留守録のCMノーカットの物が入れる事ができます。(茨城県新治郡C)

等々、各自色々な苦勞の跡が見受けられるお手紙を多数いただきました。(『Animec』1984年1月: 112-113)

このように全国から寄せられた複数の使用実践の報告を「苦勞の跡」としてまとめていることからわかるように、これは趣味をめぐる卓越の技法として評価されるというよりは、節約と映像の質の担保のための試行錯誤として存在していたということである。さらに詳細に見るといくつか考えるべき論点が、三倍速と標準をめぐる工夫の中に存在している。

まず、標準と三倍速を混交させて用いる実践が報告されていることである。余った1本分までを節約する志向性が見られると同時に、そういった節約はするが三倍速のみでは画質が下がるという葛藤がある。標準にしろ、三倍速にしろ、詰めすぎないギリギリの線が模索されていた。その際に本数の調節に失敗ないようにタイムチャートが利用される<sup>21</sup>。

先月号にひき続き、好評だったアニメ番組のタイムチャートを掲載いたします。ただし、チャートというのは、あくまで暫定的な物なので、常時注意して下さい。(『Animec』1984年1月: 112)

「常時注意」が必要なほどタイムチャートが整理に必要だったことが見てとれ、それが「好評」といった程度には受容されていたことがわかる。こうした実践の前提として、アニメ雑誌の読者は1本のビデオテープに、アニメだけを録っていたことがうかがえる。さらに「OP

を頭に、CMをカットして5話入る。そして5話収録後にEDを入れる」という記述からも推測可能なように多くのファンが一本のテープに一つの作品を録画していたことも伺える。これは、趣味として分化していたことが前提として存在するだろうが、保存の便宜といった性質が強かったのである。

再び確認すると、宮崎勤が「オタクではない」ことの根拠として、様々な映像が一本のビデオテープに入れてあることや、標準か三倍速かに関するこだわりがほとんど見られなかったこと、ビデオテープが未整理であったことが問題化されていた。だが、元来これは「オタクであるかどうか」が峻別できる卓越性を表示するような指標ではなかったのである。では、それが卓越の指標として記述されたことの意味はどのようにとらえればいいのか。

#### 5-4 こだわりの変容

4章のように無駄なく整理された録画が「オタク的であるかどうか」の評価の対象となる状況とはどのようなものだったのか。それは、ビデオというメディア自体の性質により、本来的に卓越性が示しにくいことと80年代後半の状況の変容の中で生じてくる。

ビデオテープの価格の低下により、一般家庭でビデオテープを多数所有することがごく当たり前のものとなっていた。80年代の初頭において2時間のビデオテープ1本あたり数千円していたビデオテープが、89年には数百円まで価格が下落していた<sup>22</sup>。卓越の原理の一つとして存在していた数を持つことがファン集団内ではあまり有意義なこととはならなくなった。特にアニメ等を趣味に持たなくとも数百本のビデオテープが「たまっている」ことはそう珍しいことではなくなったからである。もちろん6,000本というのは、その当時にしても所有量としては多かったが、オタクと呼ばれた人々がそれだけでは自分たちの側に立つものではないと抗弁が可能となる資源となる程度にはその説得力を失いつつあった。画質に関してもβとVHSというこだわりが存在していたが、βは80年代末に実質的に市場撤退をしたことによって次第に骨董品以上の意味を持ちにくくなった。

そうした所有だけによる卓越ではない指標がひとまずは目指されることになる。こうした従来の卓越の根拠に対して、新たな根拠として連続少女殺害事件の際に批評家によって持ちだされたのが、標準か三倍速かという枠組みと録画の効率化をどのようにしているのかといったこれまで節約の技法とされてきた問題である。また、一本のビデオテープには同じ作品や少なくとも同じジャンルに絞って録画するといった実践が行われていないことも宮崎勤が「真のオタクではない」根拠として用いられた。前述したようにビデオテープの価格が下がったこともあり、こうした録画の技法等は、実用的な意味がそれほどなくなっていったと推測される。情報の詰め込み方等の整理の仕方が、実用的なものではなく、長くそうした習慣を持ってきたという卓越の原理として持ち出され、宮崎がオタク的でないものとして位置付けることの根拠の資源として用いられたのである。ここで持ち出されたのはむしろ、これまで節約の原理が主であったものからかろうじて卓越性を発明していく実践であったといえる。そして、それがマスメディアとの差異化を志向しつつ「真のオタク」と宮崎勤の差異として切断操作を行う語りを可能にしていた。

## 6 結論——オタクが語られ出す論理

本稿は1989年に宮崎勤のビデオテープをコレクションする行為に関して、一方ではそれが「オタクの代表」とするものとして語られ、他方では宮崎勤は「真のオタク」ではないことの論拠として用いられたことに着目してきた。そうした語りがそれぞれ可能になっている条件に関して1989年のビデオのメディア史的な配置を前提として議論した。そのことに一体どのような意味があるのかに関して今後の展開を見据えながら知見をまとめる。

本稿で明らかにしたことは、オタクというカテゴリー全体を説明するものではないが、オタクをめぐる社会問題化の起点を考えるうえでは重要な視点である。宮崎を「オタクの代表」とするのにも「真のオタクではない」として語ることも切断操作であるといつてよい。問題はどのような切断操作かであり、それがどのような文脈によって生じたかである。

宮崎勤をオタクの代表とする語りは、宮崎勤を用いてオタクと一般層との断絶を行うものであった。しかし、一方で宮崎勤をオタクの代表とする語りは、「特異な集団」としてオタクを語ると同時に、それが特定の世代全体へと敷衍されるような語りでもあった。このことはビデオがパーソナルなメディアとして成立しつつ、普及し一般化していく際にビデオというメディア自体に注がれたまなざしを源としていた。それは、確かに外部に位置づけたいものであると同時に7割にまで普及している以上、広い拡張を余儀なくするものであった。そのことが若者とほぼ等値されつつも有徴さを持つオタクというカテゴリーの運用を可能にしていた。そして、切断操作が困難な中であえてそうした切断操作を行おうとするために、若者などの広いカテゴリーとして把握するようになったのである。

「真のオタク」ではないという論理も、一つの切断操作だといえる。「真のオタク」の側から宮崎を遠ざける論理の一つとして機能した根拠が、昔からあった卓越の論拠ではなかったことを指摘した。むしろ、卓越の根拠が従来の「数」に求められないがゆえにかろうじて持ち出されたのは、これまで節約と映像の質との妥協点を求める「苦慮」だった。このことはオタクが社会問題化した際の条件とその現在形を考えるうえで重要な意味を持つ。つまり、ビデオというメディアにおいては、少なくとも「真のオタク」なるものは、むしろファン集団と一般層との間の落差が曖昧になっていく危惧の中でファン集団の側が、その差異を再主張するのに適合的な論理として批評的言論の中に存在しているのである。こうした切断操作は「宮崎勤から」オタクを切断操作すると同時に、切断操作はマスメディアのカテゴリライズに対して抵抗する形で一般との差異化も目指すような実践として機能していた。

だからこそ、この両者の言説空間の中で、オタクというカテゴリーは広く世代全体を包摂しうる言葉として機能しつつ、その境界を再度引く語彙としても機能するようになったのだ。89年の時点で「オタクであるかどうか」は一般層にとってもファン集団においても明確に位置づけられるものではなかった。つまり、連続幼女殺害事件においてオタクという特殊な集団がわかりやすく存在したからオタクをめぐる語りが社会問題化したのではなく、両者にとって境界が曖昧だったからこそ、社会問題化したのである。

この連続幼女殺害事件に関する言論を振り返ることは、オタクという現象が現在語られている状況にも示唆を与える。ビデオの普及史の中で起こったこのメディア経験は、現在でも

オタクをめぐるある種の議論を制約している可能性がある。オタクという言葉はマスメディア等がオタクを語る際に具体的な対象と結びつけつつも、どこかである具体性から距離をとるような用い方がなされており、世代一般への嘆きなどにも滑らかに接続しやすい。それは、オタクという対象がそもそも「特殊さ」と「一般さ」の間の曖昧な位置づけの中で語ることが可能になっている言葉だからである。だからこそ、同時にそのマスメディアのオタクバッシングに対して、様々な「特殊な」集団が「我がこと」として、それに対して怒りをあらわにできる。そして、その記号が社会問題化した際の戦略的な立ち位置上、ある文化が「特殊であること」と「一般的であること」の境界が現代において「つけがたいからこそ」オタクという言葉は「特殊でありつつ一般性を持ち」つつ「見出され続ける特殊さ」として延命し続けているといえるかもしれない。

ただ、こうした議論を行うためにはオタクをめぐる言論の社会問題化に際してあらわれた構造だけではなく、その後批評的言論がどのように展開されたのかという議論やオタクというカテゴリーが日常の場面でどのように用いられているのかという検討がなされることが必要となる。それに関しては今後の課題としたい。

## 注

- 1 「オタク」ははじめおたくと平仮名で表記され、次第にオタクと表記されることが多くなる。本稿は引用内の表記に合わせる時以外は片仮名でオタクと表記する。
- 2 こうした言説には枚挙に暇がない。例えば「いま、日本文化の現状についてまじめに考えようとするならば、オタク系文化の検討は避けて通ることができない」（東 2001: 9）や、「現代思想家たちはなぜか誰も「おたく」に気づいていないようだが、「おたく」こそはポスト生産社会を読む鍵に違いない。」（別冊宝島編集部編 1989: 2-3）等である。
- 3 1988年から1989年に東京都および埼玉県で発生した、幼女を対象とした一連の連続殺害事件を指す。
- 4 オタクをめぐる言説を系統的に検討した松谷によると、オタクという呼称は宮崎事件発生まではアニメファン等の一部のものを超えて使われていなかったという（松谷 2005）。
- 5 一言でビデオの歴史といっても、その歴史はビデオのテクノロジーの変容や本体の価格の変容、ビデオテープ等の付属機器や周辺環境の変容などの多様な要素を含むものである。そうした多様な要素を持つ現象としてビデオを捉えたうえで、以下では文意に合わせて特定の要素に言及する場合にはビデオデッキ・ビデオテープ等と区別して記述し、ビデオとのみ書く際にはより広範な意味を込めて記述する。
- 6 分析対象は朝日新聞である。選定の理由は、発行部数が上位であるだけでなく、加害者である宮崎勤が変名（今田勇子）で犯行声明を送った新聞であり、大塚英志が「偶然かもしれないけど『朝日』に送ったというあたりが気持ちとしてはわかる」（中森・大塚 1989: 49）という形でそれに象徴的な意味を見出しているからである。事件の加害者の「宮崎勤」を朝日新聞『聞蔵』でキーワード検索し、ヒットした611件を分析した（2016年11月30日現在）。引用部内には「宮崎」と表記されるものも見られたが煩雑さを避けるために「宮崎」で統一した。
- 7 オタク論がこれまで男性に偏って関連付けられてきたことは繰り返し指摘されてきた（村瀬 2003等）。それがビデオという技術自体のイメージとも関連したものであった可能性がある。ビデオとジェンダーという論点は、海外のビデオをめぐる議論でも見られる（Gray 1992等）。日本国内の初期の受容でもビデオが男性の使用に適したものとされていたことは論じた（永田 2016）が、そうした構造を引き継いでいる可能性もあり、このビデオ・オタク・ジェンダーの関係については別稿にて

議論を行いたい。

- 8 溝尻の指摘にあるように初めビデオは家庭に普及し、それから個人へと受容されていくことになる(溝尻 2012)。これは必ずしも個室での消費を意味するものではなく、家庭内で個人的な利用を達成したものが多かった。後述するアニメファンのビデオを使用する上での工夫の必要もこうした経路を辿る中での係争と関連している。それに対し宮崎ははじめから個室での消費を行っていたようであり、整理への無頓着さはこのことに起因する可能性もある。だが、その検討は本論の主旨からはやや外れるためここでは検討しない。
- 9 日本ビデオ協会がレンタルビデオシステムを確立したのは 1982 年末だが、この時期は非合法的な店舗もまだ残存した。『アニメージュ』の 1988 年 11 月号の調査によると 1984 年時点でレンタルビデオシステムへの加盟店は 514 店舗であり、85 年 1,181、86 年 2,733、87 年 4,732、88 年 9 月 8,684 であった。
- 10 溝尻は性的なイメージが存在した一方で、その受容の状況は現在イメージされる性的な受容とはやや異なったものであったことを議論している。
- 11 永田 (2016) では 1970 年代末の時点で高校においてビデオデッキは 99 %普及しており、教員を対象としたビデオの研究会が各地で催されていたということを論じた。
- 12 例えばこの論点に関してアニメ雑誌上では、「皆はスロー再生ダビングというほとんど病気の用途に使用している」(『Animec』1984 年 4 月: 113) としてアニメファンのビデオ使用の特異性が強調され、ビデオデッキの普及率が三割程度の段階で今後の展開予測として「電子レンジのように『使いこなす人』と『死蔵する人』の二派に分れるのかもしれませんが」(『Animec』1984 年 4 月: 113) と語るような言説が存在していた。
- 13 アニメファンにおいても初期はビデオテープを集めるという活動は日常的なものではなかった。2 歳の娘が起こしたアクシデントで、「すぐに消してしまうモノラル放送用にしていた雑テープのカバーと CM 抜きで、きっちり 5 話分を録画した『イデオン』用のテープのカバーをとりかえてしまった」(『アニメージュ』1981 年 3 月: 123) という投稿からも、すぐ消す「雑テープ」と「『イデオン』用」(つまりお気に入りの作品用) のビデオテープを使い分けていることがわかる。アニメファンの中でさえも、ビデオテープの基本的な用途は一本のビデオテープに繰り返し様々なコンテンツを録画するものであったのであり、一般層にとっては一層こうした「すぐに消」し繰り返し利用する使い方が主流であったと推測される。
- 14 永田 (2015b) では、このような距離のとり方をした言説がオタクというカテゴリーの拡散の条件になっていくことを考察した。
- 15 大塚は別の場所でも「M 君もどうやら〈おたく〉にさえ落ちこぼれつつあった一人ではないのかというのが最近の印象だ。(中略) 彼は何でもいいから〈マニア〉になって〈マニア社会〉に入れてもらいたかったのではないだろうか。彼の脈絡のないコレクションはそれを物語っている」(『本の雑誌』1990 年 5 月) と語っている。
- 16 他にもコレクションにジャンルの統一性がなかったことも指摘されていた。
- 17 勿論ビデオテープのコレクションが問題になるのは、アニメファンダムに限られないが、後のオタクをめぐる言論で強く関連が見出されたり、アニメ雑誌の側で事件に対して反応したことや宮崎がアニメ雑誌を買っていたことが繰り返し報道されたりしたこと等から対象としてアニメ雑誌を選択した。
- 18 88 年には  $\beta$  の販売元の SONY も VHS ビデオデッキの製造販売に参入し、実質的に市場撤退することが明らかになっていた。
- 19 120 分の録画用ビデオテープのことを指す。80 年代中盤にはこれが最も標準的な長さになっていた。
- 20 A、B、C は雑誌上で実名であったが、プライバシーを配慮し、匿名として表記した。
- 21 タイムチャートとは、「1 OP (オープニング) 2 CM (コマーシャル) 3 本編 A パート&アイキャッチャー 4 CM (いわゆる中コマ) 5 アイキャッチャー&本編 B パート 6 CM 7 ED (エンディング) 8 予告編 9 CM 10 エンドタイトル このうち録画したいのは 1・3・5・7 ですからこれらの始まる時間が正確に判れば必要な部分のみ録画できる事になります。下段に比較的ビデオ録画率の高いと思わ

れる作品のタイムチャートを三本掲載してみました。」(『Animec』1983年12月: 116-117)といった形でスタートした企画であり、秒単位でのタイムチャートが載せられている。ただし、「掲載されたチャートと番組の編成が異なる。というお手紙を良くいただきますが地方局の場合、任意に編成を組みなおしている事が良くあります。」(『Animec』1984年1月: 113)という課題が存在してもいた。

22 例えば1981年7月号の『アニメージュ』に載せられた広告によると、VHSビデオテープの価格は120分用で4800円(90分用では4300円、60分用3500円、30分用2800円)と、現在想像されるよりもはるかに高価なものであった。それに対して85年には「VHS 60分(1本) 2300円〃(2本) 4500円 VHS 120分(1本) 3000円〃(2本) 5800円ベータ60分(1本) 1700円〃(2本) 3200円ベータ120分(1本) 2400円(2本) 4600円」(『アニメージュ』1985年4月: 186)となり、問題の89年には『ソニー『V』二時間用 T-120 が770円。』(『アニメV』1989年12月: 104)であり、さらに正規品に限らなければ『『一山いくら』の八百屋感覚で二本組、三本組の特価テープ。』(『アニメV』1989年12月: 104)があったことが語られる。

## 文献

- 東浩紀, 2001, 『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』講談社。
- 浅野智彦, 2013, 『「若者」とは誰か——アイデンティティの30年』河出書房新社。
- 別冊宝島編集部編, 1989, 『別冊宝島 おたくの本』JICC 出版局。
- Gray, Ann, 1992, *Video Playtime: The Gendering of a Leisure Technology*, London: Routledge.
- 長谷正人, 2014, 「映像文化の三つの位相——見ること, 撮ること, 撮られること」井上俊編『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』世界思想社, 114-131。
- 松谷創一郎, 2008, 「〈オタク問題〉の四半世紀——〈オタク〉はどのように〈問題視〉されてきたのか」羽瀨一代編『どこか〈問題化〉される若者たち』恒星社厚生閣, 113-140。
- 宮台真司, 2002, 『これが答えだ!——新世紀を生きるための108問108答』朝日文庫。
- 溝尻真也, 2012, 「ビデオテクノロジーの展開にみる技術/空間/セクシュアリティ」『愛知淑徳大学論集. メディアプロデュース学部篇』(2) : 39-54。
- 村瀬ひろみ, 2003, 「オタクというオーディエンス」小林直毅・毛利嘉孝編『テレビはどう見られてきたのか——テレビ・オーディエンスのいる風景』, せりか書房, 133-152。
- 永田大輔, 2015a, 「コンテンツ消費における「オタク文化の独自性」の形成過程——一九八〇年代におけるビデオテープのコマ送り・編集をめぐる語りから」『ソシオロジ』59(3) : 21-37。
- , 2015b, 「『代弁者』としてのオタク語り——1980-1990年代の批評的言説を中心として」『ソシオロギス』39: 154-173。
- , 2016, 「ビデオにおける「教育の場」と「家庭普及」——1960年代後半-70年代の業界紙『ビデオジャーナル』にみる普及戦略」『マスコミュニケーション研究』88: 137-155。
- 中森明夫, 1989, 「僕が『おたく』の名付け親になった事情」別冊宝島編集部編『別冊宝島 おたくの本』JICC 出版局, 89-100。
- 中森明夫・大塚英志, 1989, 「1989. 9. 4. ぼくらはメディアの子供だ」太田出版編『Mの世代——ぼくとミヤザキ君』太田出版, 14-98。
- 吉岡忍, 2000, 『M/世界の, 憂鬱な先端』文藝春秋。

(ながた だいすけ、明星大学非常勤講師、dn.networks410@gmail.com)  
(査読者 菊池哲彦、近藤和都)

## **The Multilayered Media Experience of Video:** Thinking about “Collecting Video Tapes” and Operating the Category of OTAKU

*NAGATA, Daisuke*

As a result of an incident in 1989, the category OTAKU received much attention and became seen as a social problem. The perpetrator's own room was covered in news reports, wherein a video collection in his room was scrutinized and linked to the category deemed OTAKU by news reports. The perpetrator of murders was narrated as 'a typical OTAKU' by the mass media, whilst critics indicated that he was by no means 'a true OTAKU.' We will consider the context in which these stories were made possible with relation to the spread of video as a medium at the time. When the perpetrator was narrated as 'a typical OTAKU' in the media, OTAKU were further ideologically separated from the rest of the general population through their pejorative reference to this particular perpetrator. In contrast, what was broached as evidence that the perpetrator was not 'a true Otaku' was that their video collection was not organized. However, the organization of fan groups' video tape collections didn't necessarily have any relation to superiority, but was instead based on one's struggle to save money when the cost of video tapes were at an all-time high during that period.